

女子学生の乳房形態について

(長野県女子学生の体質人類学的研究 第1篇)

昭和32年3月15日 受付

信州大学医学部第二解剖学教室 (指導: 鈴木誠教授)

栗 岩 純

I 緒 言

長野県に於ける女子学生の一般生体計測と同時に、特に乳房についての計測と観察を行い、それらの間に於ける関係について調査した。先づ、乳房形態そのものに人種や民族による差異が認められ、又同一種族においても年齢による差異のあることもよく知られている。Martin (1928)^①は成熟婦人の乳房形態を4型に分類し、その頻度によつて人種や民族の体質上の特徴を知る一つの目標とした。又、Stratz (1922)^②は乳房の発育段階により4型に分ち、その完成過程にも人種や民族による差異が認められることを述べている。更に、Stratz (1922, 1928)^{③④}及び Eickstedt (1942)^⑤は多数の人種や民族について、乳房に関する概説を述べている。

我が国では長谷部(1939)^⑥が南洋群島婦人の乳房について報告し、福永(1940)^⑦は台湾人及び在台日本人婦人について、更に小野(1943)^⑧が九州婦人について、高楠・申(1939)^⑨が日鮮婦人の乳房について調査している。併し、年齢及び性的経験等を考慮して検討すれば、未だ調査は充分とは言えない。

次に、乳房形態の個人差と体質との関係が考えられるが、Eickstedt^⑤は乳房の大小が栄養状態、特に脂肪沈着と極めて関係が深いことを述べている。又、Škerlj (1938)^⑩は栄養状態評価として大腿囲の価値を強調した論文中、大腿囲と乳房の大小との間には甚だ強い相関があることを記述している。その他、Holl (1920)^⑪は乳房形態と乳頭の位置との関係を調査し、両者の組合せによつて一つの傾向が認められるとしている。我が国では、高楠・申^⑨が日鮮婦人の乳房形態と Pignet-Vervaeck 指数との関係を調査した報告と島田・深山(1941)^⑫が乳腺機能と乳房形態について研究したものが、この種の研究としてあげられるにすぎない。

以上の如く乳房形態の個人差と体質との間には、何らかの関係が認められることが予測されるが、詳細な生体計測値を通じて体格全般にわたつて、乳房形態との関係を明かにしたものは未だみられない。

こゝに於て、筆者は成長が完成したと考えられ且つ性的経験(妊娠、分娩、授乳)を有しない女子学生の集団について、乳房形態そのものを調査すると共に、身体各部の計測を行い、又、それらの数値と乳房形態との関係を調べたのでその結果をこゝに発表する。

本調査に当つては、信州大学教育学部松本分校及び同医学部附属看護学校当局並びに学生各位の多大な御協力をいたした。なかんづく、二木つえ氏には終始格別の御尽力を頂いた。こゝに記して厚く御礼を申上げる。

II 調査材料及び調査方法

信州大学教育学部松本分校及び同医学部附属看護学校女子学生180名を調査の対象として選んだ。このうち、85名は昭和28年に、95名は同30年に調査した。前者については、さきに予報^⑬として一部発表してある。被検者の年齢をわけて満18才(116名)と、満19才以上21才迄(43名)の二群に区分した。

調査方法は大部分、予報中に記載してあるので、今回新たに加えた乳輪形態、乳房の左右の大きさ、乳頭の高低に関する項目のほかは説明を簡略にした。

[A] 発育の程度

次の4期(I型-IV型)を区別した。

第一期: I 型 (小児型)

第二期: II 型

第三期: III 型 (第一次乳房)

第四期: IV 型 (第二次乳房)

こゝで言う乳房とは、乳輪、乳頭及び狭義の乳房を全部含めての乳房である。

発育の各期の判定のうち、第三期と第四期の移行期にある様なものについては乳輪形態と乳頭形態を総合して決定した。

Stratz などがニグロイドに見られる著明に乳輪部の膨隆したものを第三期の典型的なものとしているが、この様なものはまれにしかみられなかつた。

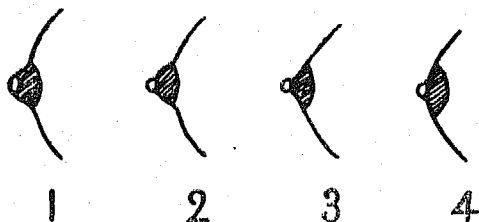
[B] 乳輪形態(第1図)

次の4期(1型-4型)に分類した。

(1) 乳暈期: 1型 (半球状乳輪)

発育期の第三期を代表する型で、乳房面から半球状に乳輪が膨隆している。この型に属する乳頭は大部分蕾状乳頭である。

乳輪形態



(2) 乳量期: 2型 (提状乳輪)

乳房面から提状に膨隆した乳輪を認める型で、乳頭は種々の型のものを含む。

(3) 移行期: 3型 (漏斗状乳輪)

乳輪の基部は乳房面から目立つて膨隆していないが先端に向にしたがい、漏斗状に乳房面から突隆している。この型に属する乳頭は完全乳頭が多い。

(4) 成熟期: 4型 (平坦乳輪)

乳房発育の最終型即ち第四期を代表する型で、乳輪は下降して平坦となり乳房面から膨隆していないもの。この型の乳頭はほとんど完全乳頭である。

なお、乳房の発育の程度の判定にさいしては、乳量期(1, 2型)を第三期に、移行期(3型)及び成熟期(4型)を合せて第四期の規準とした。

[C] 乳房形態

次の5型に区分した。

- A 型 (漏斗状乳房)
- B 型 (皿状乳房)
- C 型 (半球状乳房)
- D 型 (鐘状乳房)
- E 型 (下垂状乳房)

こゝで言う乳房は狭義の乳房であつて、乳輪、乳頭を含まない。

又 Stratz は乳房型の分類について、

- a) Mamma plana 高径が3~5cmで長径の半分以下。
- b) Mamma globosa 高径が5~6cmで長径の半分に等しい。
- c) Mamma conica 高径が6~7cmで長径の半分以上。

の三つに分け、更に長径の平均は10~12cmであると述べている。これは計測値によつて分けられた分類である。一方観察による場合は一般に予報に記載した

様な表現がとられている。

筆者も少数例について計測を実施した結果、Stratzの成績とほぼ一致した結果が得られ、然もこの分類法と観察による分類法との間に大差のないことを認めたので、表現はMartinにならい、更に不足の型を加えた。本調査に当つて計測による方法をとらなかつたのは、以上の如き理由と乳房に於ける計測点の設定が困難であるために多数例を限られた時間内に行うことがむづかしく、むしろ観察によつた方が目的に沿う様に考えられたからである。

Martinの所謂、円錐形乳房と呼ばれる様な先端に向つて急に細まる形のは認められない。特に鐘状と名付けて区別した所以である。同様に山羊様乳房と呼ばれる形のものも認められなかつた。

[D] 乳頭形態

次の4型に区分した。

- a 型 (完全乳頭)
- b 型 (蕾状乳頭)
- c 型 (陥没乳頭)
- d 型 (平坦乳頭)

a型は更に細く分ければ、所謂経産型、成熟型、移行型の三段階を区別することが出来るが、本論文中では敢えて用いていない。特に移行型には蕾状乳頭と区別しにくいものが相当数認められる。

c型に属するものも、更に次の二つに細分することが出来るが、同様本論文中ではこれを用いなかつた。その一つは成熟した乳房に認められるもの。他の一つは乳輪が発育途上にあり、ために蕾状乳頭の亜型として、膨隆した乳輪に蔽われて現われないもの。

[E] 乳頭点の左右の高低及び乳房の大きさの左右差

両者とも観察によつて、左右の相違を調査した。

[F] 計測

- 1. 乳輪径
- 2. 乳頭基部径

Ⅲ 調査成績

(1) 発育の程度(第1表)

第1表 発育の程度 (数字は例数()内は%)

	年齢	型				計
		I	II	III	IV	
右側	18才	0	0	25 (21.55)	91 (78.45)	116
	19~21才	0	0	13 (20.31)	51 (79.69)	64
	計	0	0	38 (21.11)	142 (78.83)	180
左側	18才	0	0	26 (22.41)	90 (77.59)	116
	19~21才	0	0	13 (20.31)	51 (79.69)	64
	計	0	0	39 (21.67)	141 (78.33)	180

第2表 乳輪形態 (その1)

		型	1	2	3	4	計
右側	年令						
		18才		9 (16.36)	6 (10.91)	18 (32.73)	22 (40.00)
	19~21才		7 (17.50)	2 (5.00)	10 (25.00)	21 (52.50)	40
	計		16 (16.84)	8 (8.42)	28 (29.47)	43 (45.27)	95
左側	年令						
		18才		9 (16.36)	2 (3.64)	20 (36.36)	24 (43.64)
	19~21才		6 (15.00)	4 (10.00)	8 (20.00)	22 (55.00)	40
	計		15 (15.79)	6 (6.32)	28 (29.47)	46 (48.42)	95

(その2)

右		左	1型	2型	3型	4型	計
	1型		10	1	3	2	16 (16.84)
	2型		1	4	2	1	8 (8.42)
	3型		3	0	21	4	28 (29.47)
	4型		1	1	2	39	43 (45.27)
	計		15 (15.79)	6 (6.32)	28 (29.47)	46 (48.42)	95

第3表 乳房形態

		型	A	B	C	D	E	計
右側	年令							
		18才		10 (8.62)	38 (32.76)	40 (34.48)	25 (21.55)	3 (2.59)
	19~21才		4 (6.25)	18 (28.13)	23 (35.94)	12 (18.75)	7 (10.93)	64
	計		14 (7.78)	56 (31.11)	63 (35.00)	37 (20.56)	10 (5.55)	180
左側	年令							
		18才		10 (8.62)	37 (31.90)	41 (35.34)	24 (20.69)	4 (3.45)
	19~21才		4 (6.25)	20 (31.25)	21 (32.81)	12 (18.75)	7 (10.93)	64
	計		14 (7.78)	57 (31.67)	62 (34.44)	36 (20.00)	11 (6.11)	180

大部分が成熟型であるⅣ型であり、Ⅲ型(第一次乳房)にとどまるものは20%程度にすぎない。それ以下の發育過程を示すⅠ、Ⅱ型は皆無である。二つの年令群に於ける差は見られず、左右の差異もほとんど無い。

(2) 乳輪形態(第2表)

4型(平坦乳輪)が半数を占め、次いで3型(漏斗状)、1型(半球状)の順で、2型(堤状)は最も少い。二つの年令群における差異は顕著ではないが、4型に於いて左右とも19才以上の群の割合が大であり、2型では右側で18才群が、左側では逆に19才以上の群が多い。3型は左右とも18才群が多くなっている。左右の差異は全体については明らかでない。

(3) 乳房形態(第3表)

C型(半球状乳房)が最も多く、次いでB型(皿状)、D型(縮状)の順でA型(漏斗状)、E型(下垂状)は少い。左右異型は少く、二つの年令群に於ける各型の割合にも著差を認めないが、E型の頻度は19才

以上の群において大である。

(4) 乳頭形態(第4表)

a型(完全乳頭)が半数をしめ、b型(蕾状)がこれについている。c型、d型は少数である。二つの年令群について見るに、a型の頻度は左右とも19才以上の群において高いのに反し、c型(陥没)、d型(平坦)の割合は18才群に多い。このことは、c、d両型の中には發育途上にあるものを含んでいるためであろう。左右異型は27例で、その中何れかの側で完全乳頭を示し、他側で不完全乳頭を示すものが24例ある。すなわち、右側で完全乳頭を示しながら左側で不完全乳頭を示すものが15例あり、左右関係の逆の場合は9例である。このことは左側の乳頭の發育が右側に比しおとるものが多いことを意味しているようである。

(5) 乳房の大きさ及び乳頭点の高低の左右差(第5表)

大きさについて見るに、左右ともほとんど等大を示すものが大部分で、差異を認めるものは全体の20%程

第4表

乳頭形態

(その1)

		型	a	b	c	d	計
年齢							
右側	18才		72 (62.07)	24 (20.69)	13 (11.21)	7 (6.03)	116
	19~21才		48 (75.00)	12 (18.75)	3 (4.69)	1 (1.56)	64
	計		120 (66.67)	36 (20.00)	16 (8.89)	8 (4.44)	180
左側	18才		78 (67.24)	21 (18.10)	9 (7.76)	8 (6.90)	116
	19~21才		48 (75.00)	12 (18.75)	3 (4.69)	1 (1.56)	64
	計		126 (70.00)	33 (18.33)	12 (6.67)	9 (5.00)	180

(その2)

右		左	a	b	c	d	計
a			111	9	6	0	126 (70.00)
b			7	25	1	0	33 (18.33)
c			2	1	9	0	12 (6.67)
d			0	1	0	8	9 (5.00)
計			120 (66.67)	36 (20.00)	16 (8.89)	8 (4.44)	180

第5表

乳房の左右の大きさ, 乳頭点の高低

高低 大きさ	右の方が高い			左 等高	左の方が高い			合計
	約1cm	2cm	計		計	2cm	1cm	
左右等大	1	1	2	121	1	0	1	124 (79.0)
右の方が大きい	6	0	6	1	10	3	7	17 (10.8)
左の方が大きい	6	4	10	1	5	2	3	16 (10.2)
合計	13	5	18 (11.5)	124 (78.3)	16 (10.2)	5	11	157

数字は例数()内は%

度である。そして右が大きい割合も、左の大きい割合もほとんど差がない。乳頭点の高低についてもほとんど同様である。乳頭点の高低と乳房の大きさとの関係について見ると乳房に於て右側>左側で乳頭点が左の方が高いもの58.8%, 乳房に於て左側>右側で乳頭点が右側の方が高いもの62.5%である。このことから考えると、乳房が大なるものは、小なるものより乳頭点は低位となる傾向があるように思われる。なお「乳房と体型の関係」(本論文第二篇)の論文の中に同じことを確認した。

(6) 副乳の有無

軀幹前面に於て、顕著に認められる副乳はなかつた。

(7) 計測成績(第6, 7表)

第6, 7表は乳輪径, 乳頭基部径の計測値を乳房形態の分類にもとづき各群別に算出して比較したもので

ある。こゝではA, B型を合せて第一群となし, c型を第二群に, D, E型を合せて第三群とした。同表によれば, 乳輪径, 乳頭基部径とも, 横径, 縦径をとわず乳房の発達するにしたがいその値が大となつている。乳輪径ではどの群の間にも顕著な差が認められる。乳頭基部径では両側とも縦径に於て最大, 最小の間に差が認められるのみである。全体について横径と縦径との大きさを見ると, 乳輪, 乳頭基部径とも横径の方が縦径よりも大きく, 平均値の差をt分布表により検するに乳輪径(右 $t=2.34^*$, 左 $t=3.49^*$)及び乳頭基部径(右 $t=2.95^{**}$, 左 $t=2.84^{**}$)ともに有意差が認められる。即ち, このことは乳輪, 乳頭基部径ともに円ではなくて, 長軸を横にした楕円形をなすことを示している。なお, この関係は乳房の発達のおくれている型に強く現われ, D, E群ではほとんど差が見られなくなつている。差の検定を試みた結果を右側の乳

輪径について記載すれば次のごとくである。A, B群(横径 \bar{x}_1 -縦径 \bar{x}_2)=2.62, $t=4.09^{***}$, C群($\bar{x}_1-\bar{x}_2$)=2.56, $t=3.17^{**}$, D, E群($\bar{x}_1-\bar{x}_2$)=0.34, $t=0.32$ 。

IV 総括

信州大学教育学部, 同医学部附属看護学校女子学生 180名について乳房形態に関して調査した。なお, 項目により18才(116名)と19~21才(43名)の二群に分ち, 比較考察した。

1. 発育の程度

約80%が第二次乳房で, 残りが第一次乳房の段階にとどまる。それ以下のものはなかった。

2. 乳輪形態

平坦乳輪が最も多く, 漏斗状, 半球状乳輪がこれに次いでいる。堤状乳輪は最も少い。乳輪径は, 29~31mmで, 右左差はないが, 横径と縦径との間の差は明らかで横に長軸をもつた楕円形をなす。

3. 乳房形態

半球状, 皿状, 鐘状乳房の三型が大部分を占め, 下垂, 漏斗状乳房は少数である。

4. 乳頭形態

完全に発育していないものが約20%に認められる。完全乳頭に於ける基部径は9~11mmであり, 左右差はないが, 横径と縦径との間には有意差を認める。即ち, 基底部の形状は長軸を横にした楕円形をなす。

5. 年令群による差異及び左右差

何れの項目についても, その差異は顕著ではないが, 19才以上の群において18才群よりも発育はすすんでいる様である。これは18才にて一応の成熟をおえ, 以後は漸次完全成熟(母性としての)に移行するものと考えられる。左右差はほとんど認められないが, たゞ乳頭形態において左側にやゝ変異が多い。

6. 副乳の有無

臍幹腹側面に於て顕著な副乳は皆無であつた。

文 献 (1, 2編共通)

①Bryan, A. H. and B. G. Greenberg, : Methodology

第 6 表 乳輪径の計測値 (単位: 耗)

		A+B型	C型	D+E型	合計
右乳輪径 (横径)	N	69	63	47	179
	\bar{x}	28.55	31.94	35.36	30.89
	Sx	1011.07	1261.75	977.84	4927.76
	u^2	14.86	20.31	21.22	27.69
右乳輪径 (縦径)	N	69	63	47	179
	\bar{x}	25.93	29.38	35.02	29.53
	Sx	924.61	1276.84	1392.92	5808.56
	u^2	13.59	20.56	30.23	32.64
左乳輪径 (横径)	N	71	62	47	180
	\bar{x}	29.06	31.61	34.87	31.40
	Sx	995.77	1154.73	1063.17	4161.18
	u^2	14.24	18.94	23.07	23.26
左乳輪径 (縦径)	N	71	62	47	180
	\bar{x}	26.41	29.08	34.54	29.45
	Sx	1095.14	1613.60	1301.69	5390.52
	u^2	15.66	26.46	28.25	32.93

第 7 表 乳頭基部径の計測値 (単位: 耗)

		A+B型	C型	D+E型	合計
右乳頭径 (横径)	N	48	43	34	125
	\bar{x}	10.44	10.77	11.07	10.23
	Sx	191.83	61.63	57.30	336.75
	u^2	4.09	1.47	1.72	2.71
右乳頭径 (縦径)	N	48	43	34	125
	\bar{x}	9.54	9.95	10.38	9.91
	Sx	133.93	71.91	40.10	260.03
	u^2	2.85	1.71	1.20	2.10
左乳頭径 (横径)	N	51	39	31	121
	\bar{x}	10.51	10.77	10.83	10.68
	Sx	134.75	90.96	62.37	290.46
	u^2	2.70	2.39	2.06	2.42
左乳頭径 (縦径)	N	51	39	31	121
	\bar{x}	9.55	10.13	10.32	9.93
	Sx	102.63	58.36	42.80	217.47
	u^2	2.05	1.53	1.41	1.81

in the study of physical measurements of school children. Part. II. Sexual maturation-Determination of immaturity points. Human Biol. 24, 2, 1952.

②Eickstedt, E. F.: Rassenkunde und Rassengeschichte der Menschheit, Stuttgart 1942. ③Holl, M.: Über den Abstand der Brustwarzen voneinander und die Sinusbreite beim weiblichen Geschlechte. Mitt. Anthropol. Ges. Wien L, 1920. ④Martin, R.: Lehrbuch

der Anthropologie. Jena 1928. ⑤Reynolds, E. L. and J. V. Wines: Individual differences in physical changes associated with adolescence in girls. *Am. J. Dis. Child.* 75, 1948. ⑥Škerlj, B.: Thigh girth as a means for evaluation of nutritional status. *Human Biol.* 25, 1, 1953. ⑦Stratz, C. H.: Die Rassenschönheit des Weibes Stuttgart 1928. ⑧Stratz C. H.: Die Schönheit des weiblichen Körpers. Stuttgart 1922. *⑨Bartels, M. in: Ploss, H. und Bartels, M. u. p.: Das Weib in der Natur und Völkerverkundung. Berlin 1927. ⑩Biesenberger, H.: Deformitäten und kosmetische Operationen der weiblichen Brust. Wien 1931. ⑪Bloch, A.: Présentation de portraits de jeunes négresses pour faire voir la forme particulière de l'aurole de la mamelle. *Bull. Mém. Soc. Anthropol. Paris, Sér. 5*, X, 1909. ⑫Frommolt, G.: Rassefragen in der Geburtshilfe und Gynäkologie. Leipzig 1936. ⑬Glaesmer, E. und Amersbach, R.: Die weibliche Brust. Stuttgart 1929. ⑭Glaesmer, E. Körperbau und Sexualfunktion. Stuttgart 1930. ⑮Henckel, K. O.: Über sekundäre Knospenbrust. *Anz. I.* 1924. ⑯Henke, H.: Zur Topographie des weiblichen Thorax. *Arch. Anat. Physiol., Anat. Abt.*, 1883. ⑰Holl, M.: Über ein Merkwürdiges Verhalten der Brüste bei einer Buschmannfrau. *Mitt. Anthropol. Ges. Wien L.* 1920. ⑱Jochelson-Brodsky, D.: Zur Topographie des weiblichen Körpers nordostsibirischer Völker. *Arch. Anthropol. N. F.* V, 1906. ⑲Lipiez, M.: Über ein Schema zur Bestimmung der Brustform. *Korr. Bl. Dtsch. Ges. Anthropol.* XXXVIII, 1927. ⑳Ploss, H.: Die ethnographischen Merkmale der Frauenbrust. *Arch. Anthropol.* V, 1872. ㉑Rhiel, A.: Untersuchungen zur Anthropologie und Konstitution der Deutschen Frau. *Z. Morph.* XXVI, 1927. ㉒Rothe, F.: Untersuchungen über die Brüste von 1000 norddeutschen Frauen und Mädchen. Luckenwalde 1912. ㉓Scheyer, H. F.: Hat die Körperbauform nennenswerten Einfluss auf die anatomische Beschaffenheit der Brüste und die Stillfähigkeit? *Tung-Chi XI*, 1956. ㉔Schlötz, C.: Somatologische und funktionelle Untersuchungen an 300 jungen Norwegischen Frauen. *Vidensk. Skr. Mat.-naturv. Kl. I*, 11, Oslo, 1936. ㉕Škerlj, B.: Die Körperformtypen des Weibes. *Acta Neerl. Morphol.* II, 1938. ㉖Soemmering, S. Th.: Über

die Wirkungen der Schenkelbrüste. Berlin 1793. ㉗Stratz, C. H.: *Naturgeschichte des Menschen.* Stuttgart 1922. ㉘Suk, V.: Anthropological and physiological observations on the Negroes of Natal and Zululand. *Amer. J. Phys. Anthropol.* X, 1927. ㉙Teumin, S.: Topographisch-anthropometrische Untersuchungen über die Proportionsverhältnisse des weiblichen Körpers. *Arch. Anthropol.* XXVII, 1902. ㉚v. Miklucho-Maclay, N.: Mammae mit eingeschürtem areolarem Teil bei Mädchen der Insel Jap (West-Mikronesien). *Z. Ethnol.* X, 1978. ㉛Weissenberg, S.: *Das Wachstum der Menschen.* Stuttgart 1911. ㉜阿部正直: 日本婦人の体型の研究. *日本医科大学雑誌*, 22, 4: 1955. ㉝藤田恒太郎: 生体観察. 東京, 1950. ㉞福永金太: 台湾人並びに在台内地人女子の乳房に就て. *台湾医学会雑誌*, 39, 下: 1940. ㉟古沢嘉夫・西村勝彌・野口文雄: 女子第二次性徴に関する一考察. *民族衛生*, 16, 5, 6: 1949. ㊱長谷部言人: 南洋群島女子の乳房について. *人類学雑誌*, 54, 3: 1939. ㊲金関丈夫・忽那将愛: 人類学. 先史学講座, 1: 1938. ㊳栗岩純: 女子学生の乳房形態について (予報). *信州医学会雑誌*, 4, 1: 1955. ㊴丸山敏夫: 熊本県人の乳房について. *解剖学雑誌*, 28, 5, 6: 1953. ㊵太田潜之: 本邦女子に於ける Kretschmer 氏三体型の指数的表現. *神経学雑誌*, 38, 8: 1935. ㊶小野四郎: 九州人女性に於ける乳房. *解剖学雑誌*, 21, 10: 1943. ㊷島田一男・沼山大和: 乳腺機能と乳房形態との関係. *十全会雑誌*, 46: 1941. ㊸高橋栄・申雄浩: 内鮮婦人の体質に関する比較研究 (2). *日本婦人科学会雑誌*, 34, 下: 1939. ㊹渡辺弘: 乳房の發育調査及び骨盤計測より見たる小学校児童の性別分化について. *児科雑誌*, 328: 1927. ㊺渡辺麗: 乳頭点の人類学的研究. *金沢医科大学解剖学教室業績集*, 35: 1942.

(*印: ㉑~㉛は Eickstedt²⁾による)

On the Somatological Studies of the Giri Students in Nagano Prefecture Part 1. On the Form of the Breasts

Makoto Kuriwa

Department of Anatomy, Faculty of Medicine,
Shinshu University

(Director: Prof. M. Suzuki)

The author studied the breasts form of 180 girl students in Shinshu University. The results are following.

1) Grade of Development

About four fifth of the girls has secondary breasts and others remain primary ones.

2) Form of Areola

Most of the girls has *Areola plana*, followed by funnel-shaped, semi-spherical Areola. A few of girls has table-topped Areola.

The diameter of Areola is 29-31 mm. The shape is almost ellipsoid.

3) Form of Mamma

Most of them has semi-spherical, dish-like,

and bell-like mamma, and only a few has *mamma ascendens* and funnel-shaped one.

4) Form of Nipple

One fifth of them has the nipples which do not achieve the maturity yet.

In the full-developed nipples the diameters at basis range between 9 and 11 mm. The shape is ellipsoid.

5) Existence of Accessory Breasts.

No distinguished accessory breasts were found among them.

子宮頸部に発生した滑平筋肉腫の一剖検例

昭和32年2月22日 受付

信州大学医学部病理学教室 (石井善一郎教授, 那須毅教授)

薄 井 眞 中 村 雅 男

子宮腫瘍としてしばしば遭遇するものは癌腫及筋腫で、肉腫の発生はこれらに比し遙かに稀である。その中でも頸部に発生する肉腫は更に稀有なものであつて子宮体部肉腫の0.1%に相当するに過ぎない。子宮肉腫の多くは筋肉腫であることは幾多の報告例によつて知るところであるが、ひるがえつて肉腫が筋腫を母体として発生したものか或は全く無関係であるかの点を明らかにすることは個々の場合仲々困難な問題である。

我々は偶々、子宮滑平筋肉腫の再発によつて死亡した51才家婦を剖検する機会を得たのでこれを報告すると共に組織学的検索を基として以上の点についても考察を加えたいと思う。

臨床的事項

患者: 51才家婦。

家族歴: 特記すべきものはない。

既往歴: 48才の時赤痢に罹患した外には著患を知らない。初潮15才、既往妊娠8回、分娩4回、他は2ヶ月で自然流産した。終経は51才の1月であつた。

現病歴: 約1~2年来月経が少しく早くなると共に白色帯下が増量した、昭和29年2月右下腹部に鶏卵大の硬い腫瘍をふれたが異常自覚症はなかつた。信大産婦人科を訪れ子宮筋腫の診断をうけ、この頃から性器

出血を認め2月下旬入院した。

入院時所見: 肥満型で心・肺に異常なく右下腹部に超鶏卵大のやゝ硬い圧痛のある腫瘍をふれるが移動性はない。内診所見として、子宮頸部は花采状鶏卵大に腫大し周囲の陰壁は全周に亘り硬く浸潤され、子宮は児頭大凹凸不平でやゝ硬靱である鏡診上出血性で一部に凝血の附着した腫瘍を認めた。

手術: 3月1日子宮悪性腫瘍の臨床診断のもとに腹式子宮全摘出兼両側副属器剔除術が行われた。

副属器に異常はなく、子宮頸部は凹凸不平に著明に腫大してダルマ型をなしている。

摘出物は重量 630g で子宮体部は硬度剖面共に正常である。頸部は著明に腫大して児頭大となり該部に超鶏卵大乃至鳩卵大の一見筋腫結節様の腫瘍結節がある。硬度はやゝ軟で剖面では髓様淡紅色、中心部は髓様に軟化している。夫々の腫瘍結節は明瞭に境界されているが一部は破壊されている。

術後経過: 4月8日軽快退院したが6月下旬性器出血があり再入院した。腹部に再び腫瘍をふれレ線治療を行つたが、腫瘍は次第に増大し殆ど小骨盤を充たすに至り7月27日死亡した。全経過は約6ヶ月、術後5ヶ月であつた。

病理的事項